

宝塚「ポーの一族」を巡って

宝塚歌劇団特別顧問・演出

小池修一郎
こいけ しゅういちろう

コロナの猛威が吹き荒れる年末年始、私は梅田芸術劇場制作のミュージカル「ポーの一族」の稽古をしていた。萩尾望都先生の原作は、少年の吸血鬼（バンパネラ）が時代を経巡る少女漫画の金字塔である。発表からほぼ半世紀経つが全く色褪せず21世紀に入りますますます輝きを増している。

私が「ポー」に出会ったのは学生時代1976年頃のことである。子どもの頃クラスで回し読みした楳図かずおのホラー漫画以外、殆ど少女漫画を読んだことがなかった私にとって、衝撃の1作であった。ミュージカルの演出家になりたくて道を模索していた私は、この作品をやるなら宝塚しかないと思った。宝塚は1974年に「ベルサイユのばら」で画期的な成功を収めていたし、漫画の神様・手塚治虫の「リボンの騎士」は明らかな「宝塚へのオマージュ」であったからだ。

1977年に宝塚歌劇団に入団した私が、実際に「ポー」を実現させるのには41年掛かった。私は導かれていたのだと思う。1985年、帝国ホテルのコーヒーマシントップでたまたま隣に座っていたのが萩尾先生で、2度とない機会だと思ひ、まだ演出家にもなっていないのに、図々しくも「いつかポーをや

らせて欲しい」とお願いしたので。その翌年、晴れて演出家デビューしたものの、よく考えてみると宝塚の男役トップスターは皆背が高く、少年には見えないのだった（少年役はスリムな娘役が演ずることが多かった）。

それから年月が経った。2015年、宝塚で「ルパン三世」が上演された。遡る1990年に私が歌劇団に「ルパン三世」を提案した時には「清く正しく美しくの宝塚で出来るわけがない！」と一蹴されたものだ。時代は「何でもあり」に変わったのだと思った。「ベルばら」以後、宝塚でマンガ原作は「ブラックジャック」に至るまで多々上演されているが、私は機会がなかった。そこで2016年に以前から向いていると思っていた「るろうに剣心」をやることにした。幕末のキャラクターは宝塚でも人気がある。原作ファンから「男役が扮すると男優が演ずるより原画に近い」という声が上がリ、改めて「宝塚と漫画の親和性」を認識するに至った。ブロードウェイの作曲家フランク・ワイルドホーンが初めて宝塚を観た時、



2018年花組宝塚大劇場公演「ポーの一族」より
©宝塚歌劇団 (Photographer Chagoon)

時の調べ
Essay

出演者のメーカーキャップや演技のスタイルを「ジャパニメーションのようだ」と言った。彼の息子は日本アニメの大ファンであり、これが日本の文化なのかと感心していたのを思い出した。

歌舞伎や宝塚という同性のみによる演劇、マンガとアニメ、その共通点は「現実の戯画化」であり「象徴化」である。一見リアルではないが、テーマは強調される。海外で、日本の小説や映画に比べ、アニメの認知度は圧倒的である。この創作スタイル



2018年花組宝塚大劇場公演「ボーの一族」より
原作／萩尾望都「ボーの一族」(小学館フラワーコミックス)

©宝塚歌劇団

は、日本が世界に誇る伝統文化でもあるのだ。「ボーの一族」はその1つの頂きを極める作品であり、宝塚でやらないままでは、私は初志を棄てたことになってしまう。何とかならないものかと思った時、

明日海りおの花組公演を担当することになった。明日海は清潔だがどこか妖しく神秘的な魅力を持っている。男役だが、幸い高身長ではない。ギリギリ少年役は行けそうである。志してから43年。萩尾先生に直談判してから33年。「ボーの一族」は2018年元旦宝塚大劇場で幕を開け、夢は実現した。

物語は現実の世の中で生きる場所を探す不老不死のバンパネラの少年達の生き様を描き出す。彼らの孤独感に今日の若者達との接点があった。宝塚のキヤパシテイも広がり、男役トップスターがバンパネラの少年を演ずることに異論は上がらなかった。そして3年後の今年。上述の如く宝塚を退団した明日海の主演で千葉雄大ほか男女の共演者と再演するに至り、幸いにも好評を得た。

時代はどんどん進んで行く。世は2・5次元ミュージカルと呼ばれるアニメやゲームのキャラクターの扮装をした役者による「再現モノ」が大流行りである。しかし、単なる再現ではなく、中身を抽出し絞り込まざるを得ない「同性による演劇」は、原作が潜める物語の影を立体化し、さらなる次元へと踏み出すことが出来ると思う。それは、日本人が培ってきた「象徴化」という文化の結晶にほかならない。これからもユニークな宝塚でしか生まれ得ない作品が続々と作り続けられることを願って止まない。



©T.MINAMOTO

略歴
東京都出身。1977年宝塚歌劇団入団。91年「華麗なるギャツビー」で第17回菊田一夫演劇賞を受賞。96年初演の「エリザベート」は今も再演を重ねている。以来、「ロミオとジュリエット」「オーシャンズ11」「1789「るろうに剣心」」「ボーの一族」など、手掛けた作品は国内外から高い評価を受ける。千田是也賞、読売演劇賞、文部科学大臣賞、等々受賞。その功績が讃えられ、2014年紫綬褒章受賞。